

アキハバラ@ DEEP

2006(平成18)年8月29日鑑賞(東映試写室)



監督・脚本＝源孝志／原作＝石田衣良『アキハバラ@ DEEP』(文藝春秋刊)／出演＝成宮寛貴／山田優／忍成修吾／荒川良々／三浦春馬／寺島しのぶ／萩原聖人／佐々木蔵之介(東映配給／2006年日本映画／110分)

……アキバこと電腦都市秋葉原に集う4人のオタクに女性格闘家を加えた5人がIT企業を立ち上げ、革命的な検索エンジン“クルーク”を開発した。それを狙うのは巨大IT企業のデジタル・キャピタル社。さてその攻防戦は如何に……？『東京タワー』の源孝志監督がインターネットビジネスの世界に目をつけたのは面白いが、できればホリエモン全盛期に、そのアンチテーゼとして、公開してほしかったナア……？

電腦都市アキバに集うのは？

この映画の原作は、第129回直木賞を受賞した石田衣良の同名小説とのことだが、残念ながら私は全然知らないもの。そこで映画鑑賞後ネットで調べてみると、基本的ストーリーは同じだが、原作では会社を立ち上げるのが6人のオタクとされているところ、映画ではこれを5人に減らしている。これはキャラをあまり広げすぎないように配慮したため……？

といっても、本当にアキバに集う本来の意味でのITオタクは、①重度の吃音者のページ(成宮寛貴)、②不潔恐怖症で女恐怖症のボックス(忍成修吾)、③光や音の周期的な点滅などで原因不明の発作がおきるタイコ(荒川良々)の3人。つまり、生まれつきのアルビノ(色素欠乏症)のイズム(三浦春馬)と紅一点の女格闘家アキラ(山田優)は後からこの3人に合流するもの。さてこの5人が起業した「アキハバラ@ DEEP」が目指すものは……？

■ 5人を結びつけたサイトは……？ クルークとは？

3人のオタクを結びつけたのは、悩み相談専門の「ユイのライフガード」というサイト。要するにこのサイトにおけるユイさんの回答が、今どきのオタクにピッタリはまったということ……。そんなユイさんが突然亡くなったことが、3人のオタクを結びつけるきっかけに。そして、アキラもこのサイトにアクセスしていただろうし、イズムはこのサイトの管理者だった……。そんな中、ユイさんがやっていたサイトを引き継ぐとともに、これをさらにグレードアップするべく考え出したのが自らの力による起業。つまり、既にたくさん蓄積されていたユイさんの悩み相談に対する回答をデータベースとし、そこに5人の異なるキャラをうまく加えれば、優秀な人工知能が作れるのではないか、ということだ。そこで生まれた会社が「アキハバラ@DEEP」。

こんな夢みたいな検索エンジン「クルーク」は、そんな5人の体験上の必要性から生まれたもの。したがってこれは、どこからでも誰からでも無料でアクセスでき、みんなの悩みの解決に役立つものになるはずだったが……？

■ 中込威=堀江貴文……？

この映画に登場する巨大IT企業デジタル・キャピタルの社長である中込威（佐々木蔵之介）は、ある面においてはホリエモンこと堀江貴文にそっくり……。当然源監督もそれを意識しているはず。それは、デジタル・キャピタルの本社を某超高層ビルの中に設定しているだけではなく、そのしゃべり方やその背後にある彼の組織論や会社経営論をみてもいえること……。彼が狙ったのは、革命的な検索エンジン「クルーク」をデジタル・キャピタル社に取り込むこと。そのため彼はうまく5人を取り込んだ上、パーティーの席で、完全業務提携の構想を発表したが……？

他方、この映画ではホンモノの堀江貴文とは全く異質の面（？）も、かなり露骨に見せている……。それは、中込が明らかにヤミ勢力と結託して、暴力を含む裏街道を走っていること。つまり、中込の構想に対して公然と拒否の姿勢を示した5人から「クルーク」のデータを奪い取ったうえこの5人を完全に「抹殺」

しようとしたのだった……。映画だからどんな設定をしても自由だといえばそれまでだが、堀江貴文の刑事裁判が9月4日以降、集中審理方式によって開始されようとしている今、堀江貴文をイメージした中込が、華やかな経営者像の裏でこんな暴力団まがいのことをやっていたとスクリーン上で示すのはちょっとヤバイのでは……？

幸い2009年5月までに施行される裁判員制度はまだ始まっていないが、出来の悪い裁判員であれば、こんな映画のストーリーを見ることによって、有罪の評決を下す危険もあるのでは……？

渡会藤子=乙部綾子……？

ホリエモンの全盛期にいつも付き添っていたのが美人広報担当の乙部綾子嬢だったが、映画では中込にいつも付き添っているのは警察OBの渡会藤子（寺島しのぶ）。これが全身黒ずくめのちょっといい女だが、ボディガード兼秘書兼相談役というかなり重要な役割を担っている感じ。したがって、彼女の中込への忠誠心がホンモノなら、ちっぽけな5人の会社「アキハバラ@DEEP」が「反乱」を企てても、容易に太刀打ちできないはずだったが……？

反中込派の動きにも注目……

中込流会社経営術の本質は、徹底した競争と差別化。したがって、ごく1部のエリート社員には莫大な年収が与えられるが、下部の労働者たちの待遇はひどいもの。そこでこの映画では、競争から脱落した元幹部や違法スレスレで首切りされた社員たちがプラカードを掲げてデモ行進をし、反中込闘争をやっている姿がスクリーン上に登場する。ホリエモン全盛期にもライブドア内外にこのような反堀江派が存在していたはずだが、現実はその姿が表面に出ることはなかったことと対比すれば、少し現実離れしているかもしれないが、面白いもの……。したがって、中込の数々の違法行為によって検索エンジン「クルーク」のデータを奪い取られてしまった「アキハバラ@DEEP」5人組の報復には、彼ら反中込派の協力が不可欠……。

映画だからいいようなものの……？

映画の後半、中込によってボロボロに痛めつけられた5人の姿が映し出されるが、その1カ月後、アキラがふと耳にした曲は藤圭子の『命預けます』。なぜかその歌詞とメロディが心に残ったアキラが次に観に行った映画は、藤純子演ずる勸善懲悪のヤクザもの……。

そのココロは警察に捕まることも覚悟したうえで、中込から「クルーク」のデータを奪い返すための実力行使に及ぶこと。つまり、緋牡丹のお竜さん同様、すべてを賭けて最後の殴り込みを執行するというものだ。その執行のサマは映画を観てのお楽しみだが、これはあくまで映画の世界。何でもゲーム感覚が染みついている今ドキの若者は、くれぐれもこのまねをしないように……。

2006（平成18）年8月30日記

ミニコラム

SHOW - HEY シネサークルの設立宣言！

「また、先生何をすんねん！」という声にもめげず、07年4月からSHOW - HEY シネサークル（S.C.C）がスタートすることになった（年会費2000円）。

これは、私が書く新作映画情報を掲載した「わらじ通信」と名づけた会報を3カ月に1度送付することを基本とするサークル。会則第2条が定めるその目的は、「映画大好き・おもしろいこと大好き・人間大好きな人に対し、本会を通じてさまざまな特典やサービスを提供することにより、豊かな人生を過ごすことを目的とする」というも

ので、現在入会者は約70名。中には5年分の年会費を前納してくれた人もいるが、初期の入会者は映画論・芸術論にかけては猛者ぞろいで、書きたがり・しゃべりたがりのおじさん・おばさんもチラホラ。目下「わらじ通信」第1号を製作中だが、その他、会員懇親会や映画検定対策勉強会等のイベントも検討中。発足後、映画大好き人間同士のどんな交流が実現するか、大いに楽しみにしている。読者の皆様も是非ご参加を。

2007（平成19）年3月13日記